

2010 年度第 1 回 FD研究会の開催報告について

廣崎匡氏（本学キャリアアドバイザー。「職業と人生」を担当）を講師にお迎えし、「企業が求める人材像」について理解を深め、現状の取組を振り返るとともに今後の取組に対する課題認識を高めることを目指した。具体的には、次の獲得目標を設定した。

【開催概要】

テーマ：「企業が求める人材像」という観点から授業改善を考える

日時：11月4日（木）15:00～16:30

対象：専任教職員ならびに非常勤講師

【獲得目標】

- ・ 社会からの人材育成の要請に応えるため、正課教育（授業）や課外活動（サークルやボランティア、あるいは大学運営に学生が参画する取組など）がどのような役割を担っているか？ ということを考える上でのヒントを得る
- ・ これまでの実践（例えば、授業の内容や教授法、窓口での学生指導スタイル、あるいは課外活動での指導法など）は社会で求められる能力を学生に身に付けさせる上で有効だったろうか？ という省察を行う上で必要な視点を得る

23名の教職員（専任教員16名、職員7名）が参加した。

講師からは、企業の採用方針が「学生のポテンシャル（潜在能力）を見る」から「獲得している能力やコンピテンシーを重視する」に変化しており、正課教育や正課外活動において、学生が自らの能力・コンピテンシーを鍛え上げようとする“意識化”を促すことが求められている、という指摘があった。つまり、次のような能力発揮の体験を持つ機会を与えることが必要ということである。



- 1) サークルやゼミなどで、何か問題になるようなことに気づいた（課題発見）
- 2) その問題に関して、研究もしくは調査などをした（分析）
- 3) どこに一番の問題があるか発見できた（本質発見）
- 4) 問題解決策を提案することができた（創造力）
- 5) 解決のための計画を立案できた（計画力）
- 6) 解決のために、自ら行動することができた（実行力）
- 7) その結果、問題を解決することができた（達成）
- 8) 解決したことをさらなる発展のために検証することができた（課題発見）

また、就職できない6つのタイプとして、「関心がない」、「目先のことに目を奪われている」、「聞かない見ない」、「イメージに乏しい」、「実行しない」、「チャンス进行を逃す」という行動特性が示された。これを変革するために授業の中での働きかけが求められる、という指摘である。

参加者アンケート（別紙参照）を見ると、「授業の中で『学生の気づき』を促す取り組みの必要性を感じた」、「初年次ゼミでの社会人基礎づくりを強く念頭に置いた教育が必要」、「就職指導は、ゼミナール担当教員が責任を持たなければならないことを再確認した」、「『何かをやり遂げる体験』が大切で、卒論がこの体験に役立つ。必修ではないが、執筆を勧めたい」といったように、正課授業において学生の（就業）能力をアップさせることの重要性についての記述があり、所期の目標は達成されたと考える。

